

注解『七十一番職人歌合』稿(六)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には『七十一番職人歌合』の中、第十五番および第十六番の注解を収めた。

十五番 蛤壳 魚壳

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕十一番左 桂女

かつら川ふる河のへのかひふねいく夜の月をいとひ来ぬらん

左、かつら川ふる河のへのとつゝけられたる、證哥の侍るにや。万葉集よりはじめて代々の集にも、泊瀬川ふる河のへとこそつゝけられ侍るめれ。また、鵜飼船に月をいとふならひはさる事なれとも、題の心にそむけり。…右の勝とすへし。

こひわひて瀬にふすあゆのうちさひれほねとかはとにやせなりにけり

左は誹諧の哥の姿にて、当世の風情にあらす。…仍右を勝とす。

〔三十二番職人歌合〕五番・二十一番左 桂乃女

注解『七十一番職人歌合』稿(六)

春風にわかゆの桶をいたゞきてたもともししか花をゝるかな

左、わかゆの桶をいたゞきて袂もつしか花をゝるといへる、かの月中の桂男よりは、此桂の女はきよけにみゆるにや。きぬあやならぬ布のひとつへきぬなから、つしか花をゝるとあるも、よくいひなされてきこゆ。春風こそさせるよせなく侍れと、孟郊か一日見尽長安花も侍るうへ、つしか花染はかりにては、春の花の心もかすかに侍るへきにや。……左は、猶ちからいりてきこゆるにや。

名のりのみあゆは上臆けたましやよこれわらうつしほれかたひら

左哥、上の句は桂か境談の持言、下の句は桂か朝暮不断の出立也。名のみ上臆にて、出立はよこれわらうつしほれかたひらといへる、おかしきこゆ。……桂か歌、よめるかつらよりも見所なくや侍らん。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 十番左 鮎うり

あひうらふたらさりけるよわれ人にとりをくれしとおもひぬるかな

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 桂女 立ち寄りて眺むる月の桂鮎こはうるかとぞいふべかりける〔吾吟我集〕あふ中も今は離れて蛤の刺き身より猶うき身成りけり〔人倫訓蒙図彙〕鵜遣 早瀬に船を浮かめ、あまたの鳥の綱を手に持ちて、それ〴〵に捌き、鳥魚を捕れば引き上ぐる所作、大方ならぬ早態なり。罪も報いも忘れはてたるありさまは、あはれはかなき罪業なり、昔甲斐の沢川の鵜遣、死して浮かみかね、妾者にて高き知識に罪を懺悔しければ、御僧、妙の一字を一石に一字づゝ書かす。甲ありし功力によつて、浮かみしとなり。／魚屋 諸国より出る。榎木町の西、武者小路錦小路等其の他所々にあり。鳥鮎等同じく是を商ふ、同所にあり。〔狂詠犬百人一首〕 嵯峨おみつ 売れず佐びほさめ鮎だに有る物を塩に朽ちなむ名こそ惜しけれ〔江戸職人歌合〕 五番右 魚売 山の手はかたぶく月を惜しむとてあいのいをだに寝られざりけり 左右共無 申旨。判云、……右は、月を惜しむ情深く侍り。可為勝。飛びかへり猶ぞ恋しき夕河岸のあぢきなしとはかつおもひても……左申云、あぢきなしといふ詞、誠にあぢきななくや。判云、あぢきなしといふ詞、近代をさゝ詠まぬ事に侍るにや。此の右の歌にとりては、いとよく言ひ下されて侍りけり。初句ぞ打ち平め俗語めきては侍れども、夕河岸にとりては飛ぶといふ文字大切也。……なほ夕河岸の鮎なん、味勝りては侍りける。〔今様職人尽歌合〕 初物の名のみは同じ筋鯉そをだに片身売り残さばや 紺屋の白袴とかや、初鯉は日々に商ひながら、妻子にもくれず、我が口にも入れざる事を歎き、せめて筋鯉なりとも今日の夕鮎の料にはせんと売り残し、魚売の心さる事に聞こえたり。……左の、そをだに片身売り残さばやと、新古今の峯の雲を思ひ寄せたる調べ高く侍れば、破衣を質に置きても中々やすくは負くべからず。〔飛び魚よりもいではやく飛び行かばや〕／春の日に魚荷下る

して眺めれば袖腐らする花の下露 陶師の月、魚売の花、とりくゝに興あり。一荷に担ふべし。／月見ると門に筵を敷ける夜はいをだにやすくねもならぬかな 門に筵を敷ける夜はなど、少し振舞はれたれど、此の魚あしき香のつきて新しからず。あし萩集に、初鯉山ほととぎす待つころはいをだにやすくねもならぬかな、と出でたるを不知して、古きを求められたるは無念なるべし。此の魚を肥やしとせば、根つきかぬる植木も花や咲くらん。依而右を為勝。／盛りなる花のころには雨風のしけるを嘆く身のおぢき納屋 ……左、盛りなる花に雨風を厭ふ魚売の心、やさしう聞こゆ。いさゝか勝るべし。／亡き父母の法事も出来ぬ此の身かなたひや／と呼びて売れども / 片もひのあはびの貝や夕河岸のあぢきなき身もかこつ憂き恋一枝のほしさに魚を安くしてもとに廻れる花の下陰 / 夕暮に桂鮎売る商人は月にも召せと呼びありくらん / 逆らはぬ水にすむてふ川魚の流れ渡りに世を過ぐす哉 (近世職人尽絵詞) 北条五代記に、地獄網といへる大網の事を載せて、武州繁昌に随ひて西国の海士入り来たれり。今は十の物一つもなしといへれど、今日日本橋新場の市、江戸前の魚、海内無双といふべし。されば、古の漁獵はさぞと思はる。よろづの宝海より上がるといへる市語ありしが、いまはよろづを一とし、のを二とするのみ伝はれり。「ばんどうくゝ」「のつくゝ」「ぶり、がれんくゝ」(宝船桂帆柱) 肴屋 身上に尾鱭のつきて勇ましと日々々に新たな肴商ひ「くぎだなの井戸で上物になる」(難波職人歌合) 上二十五番 生洲・魚問屋 秋の夜を長しといふも月影のまろきも宿の名にこそ有りけれ 右の方人云、此の歌、何事を云へりや。心も詞も無下に聞こえず。左方答、鱧を長と云ひ、鱈を丸と云ふは通言なり。それを夜の長きと月の丸きに云ひかけたるなり。月もなほ所からこそめでたけれ影をあまたに見分けざらめや左の方人云はく、人の歌を難じながら、此の歌は何ぞや。月の上は聞こゆるやうなれども、無下に心なきをや。右方答、雑魚場に集ふ遠近の魚ども、其の海によりてよしあし有るを見分けて価を定むる事、れんじて知らざれば益なきを云ふなり。判に云はく、左の歌、惣じて俳諧なり。されど心はをかしと云ふべし。右の歌、詞こそうるはしけれ、惣じては云ひ遅れたりと聞こゆれば、猶左をもて勝とすべし。

【本文】

十五番

ことうらの月もなにはのはまくりの
かるひろふまでえやはすみける
かつらあゆとりてうるかとやみまたは
月のあたひはなくなりぬへし

注解『七十一番職人歌合』稿(六)

ことうら(類)こと浦 はまくり(類)始
かる(忠)(明)かひ(類)貝
かつらあゆ(類)かつら鮎
あたひ(類)価 なくなりぬへし(類)なく成ぬへし

左、本歌にすかりて、しかも月をほめたる、よろしく侍り。右、あたひといふ詞、哥にも侍らめと、なにとやらむいやしくきこゆ。やみを侍らむも又いかゞ。仍以左為勝。

まつ人のさはるといはてきませかし

はまくりうらふあめはふるとも

はやくこそ六角町のうり魚の

なれぬさきよりかはりはてけれ

右、六角町いかゞ。古き哥にも町をは市と

こそよめれ。又、六かくまちならても、魚はうりかひてん。いかさまにも猶左かつへくや。



はまくりうり

ひけのあるは

いへのはちにて

なうぞ。

いおうり

ことのほかなる

ひけのなきかな。

いおは候。



よろしく侍り〔類〕宜侍り

なにとやらむ〔類〕何とやらん いやしく〔類〕賤く

まつ人〔類〕待人 いはて〔類〕いはた

はまくり〔類〕蛤 あめはふるとも〔類〕雨は降とも

なれぬさき〔類〕なれぬ先

いかゞ〔類〕如何 古き哥〔類〕古歌

六かくまち〔類〕六角町 うりかひてん〔尊〕うりかひてむ

〔類〕売かひてん

かつへくや〔類〕可勝や

はまくりうり〔白〕蛤売〔忠〕十五番 蛤売〔類〕蛤うり

いへー〔白〕忠家

さうそー〔白〕さう候

いおうり〔白〕魚売〔忠〕魚売〔明〕類いをうり

ことのほかなるひけのなきかな〔明〕類蛤売ノ言葉

ことのほかー〔白〕忠ことの外

なきかな〔白〕忠なき哉
いおは候……めせかし〔白〕ナシ いおー〔明〕類いを

あたらしく候。
めせかし。

【語注】

◎蛤壳は職人歌合に初出。

魚壳に関するものとしては、十二番本『東北院職人歌合』十一番左に桂女、『三十二番職人歌合』五番・二十一番左に桂乃女がある。『飛鳥井雅康 職人歌』十番左が鮎うりであるが、その歌は、改作して、本職人歌合三十一番左、銀細工の恋の歌とされている。

◎ことうらの…… 「忘れじな難波の秋の夜半の空こと浦に澄む月は見るとも〈宜秋門院丹波〉」（新古今集、四、秋）の本歌取り。

◎ことうらの月もなにはのはまくりの 「異浦」はよその浦。ここは難波以外の浦。「異浦の月も」は、下句「貝拾ふまでえやは澄みける」に掛かるが、同時に、よその浦の月など比較にもならない、の意の、「異浦の月も何（かは）」から「難波」と続く。「難波の蛤」は、後世の例だが、「津の国の難波のみつの蛤を踏むにもあしのうらに知らるる」（吾吟我集、八）、「難波潟興おもしろや足のもとにじらで人のにじろ蛤〈良久〉」（後撰夷曲集、九）の例がある。

◎かみひろふまでえやはすみける 異浦の月が、ここ難波の月と同じように、夜でも貝を拾うことができるほど、こんなに明るく澄んでいるはずがあらうか。

◎かつらあゆ 桂川の鮎。桂川は、京都郊外西南を流れる川。そこで捕れる鮎は、平安時代以来、桂贄人、後の桂供御人による鵜飼で有名、歌の好材料とされて来た。南北朝以降、供御人は衰退したが、鵜飼そのものは鑑賞用に続けられた。鵜飼集団の女性である桂女は、鮎の行商を行っていた。本職人歌合の絵も桂女を描く。

◎とりてうるか 捕って売らうか、の意。「売らんか」と言うべきところだが、鮎に言い懸けるため「売るか」と言った。鮎は、鮎のはらわた。また、その塩漬。

◎やみまたは 鵜飼は篝火を焚いて鮎を誘う漁法なので、月の明るい時は行わない。「久方の中なる河の鵜飼舟いかに契りて闇を待つらん〈定家〉」（新古今集、三、夏）、「闇を待つ夜川の鵜舟何ゆゑに燈す篝の光なるらん〈為定〉」（文保百首）、「うたてなど来ん世をかけて鵜飼舟月の桂の闇を待つらん〈洞院公賢〉」（延文百首）など、鵜飼と闇との關係を詠んだ歌は数多い。謡曲「鵜飼」にも、「今の雲の上人も、月なき夜半をこそ悲しみ給ふに、われはそれには引き替へ、月の夜頃を厭ひ、闇になる夜を悦べば」、「いつも月の程はこの御堂に休らひ、月入りて鵜を使ひ候ふ」とある。十二番本『東北院職人歌合』十一番左、桂女の月の歌、「桂川古河のへの鵜飼舟いく夜の月を厭ひ来ぬらん」も同趣向。なお、闇夜の漁については、十一番語注「やみにこそいさりはせしか」および「いさり人はやみにねす、月にやすむ」の項参照。

◎月のあたひはなくなりぬへし「値」は価値。闇を待つようでは、折角の月の値打ちもなくなってしまうであろう、というのである。「値」は価格という意味もあり、「売る」の縁語。「値」という、和歌に相應しくない言葉（後述）を用いた点が滑稽。

◎本歌にすかりて、しかも月をほめたる 本歌に依拠しながら、しかも独自の表現で月をほめた、というのである。

◎あたひといふ詞、哥にも侍らめと、なにとやらむいやくきこゆ「値」という言葉は、歌でも使わないわけではないだろうが、何となく卑しく聞こえてよくない。「値なき宝といふとも一杯ちよの濁れる酒にあにまさめやも〈大伴旅人〉」（万葉集、三、雑）は著名だが、「値」は元来、漢文訓読系の言葉で（築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』第四章、二に、慈恩傳古點に見えて、源氏物語に見えない語として挙げられている）、普通和歌には用いない。その上、金錢を連想させるので、「卑しく聞こゆ」と言った。なお、本職人歌合には、他に、「値なき夜をばいかがせむじ物月見遊びに買ふ人もがな」（二十四番右、煎じ物売の月の歌）、「商ひの秋の値も高潮の今宵ぞ月の名をも売るなる」（三十八番左、塩売の月の歌）の例がある。

◎やみを待らむも又いか、月の歌だから当然月を恋うべきであるのに、反対に、闇を待つというのはいかがなも

のであるうか。十二番本『東北院職人歌合』十一番左、桂女の月の歌の判詞にも、「鵜飼船に月を厭ふ習ひはさる事なれども、題の心に背けり」とある。

◎まつ人のさはるといはてきませかし「いはて」は、類従本には「いはた」とあるが、誤刻であろう。私が待っている男が、差し障りがあるなどと言わないでやって来てほしい、というのである。『日本職人辞典』は、「障る」に女の体の障りの連想をきかせているとし、次の「蛤売らふ」にもエロチックな意味があるとする（「蛤売」の項）が、いかが。

◎はまくりうらふあめはふるとも「雨は降るとも」は、いわゆる倒置法で、上句に対する逆接の仮定条件。たとえ雨は降っても（……来てほしい）。「蛤売らふ」は、蛤売の売り声であろうが、「雨は降るとも」を引き出すために、枕詞的に挿入されたと思われる。蛤と雨との関係は未考だが、蛤は雨を呼ぶとの俗信があったか。後世の例だが、「……鳴も悦び芦辺をさして満ちくる汐に蛤の、即ち隠れ沈みけり。ハア時雨れさうないざ帰らうと、見るや洲崎に楫を絶え……」（国性翁合戦、二）、「何所となく声の時雨る、夜蛤、〈咫堂〉（誹諧職人尽前集、蛤売）、「蛤のつひのけぶりや夕時雨」（七番日記）などがある。または、「蛤能く気を吐いて楼台をなす」（史記、天官書による）と言われることと関係あるか。『和漢三才図会』四十七に、「按ズルニ、車螯氣ヲ吐クト也、晴レズ陰ラザルノ日夜間此ノ氣有リ、船人為ニ惑ハサル、遅ク晴ルレバ則チ晴天ト為リ、速ク晴ルルトキハ則チ風雨ト為ル」（「車螯」の項）とあり、『難波土産』四にも、「よく気を吐いて楼台をなすといふ蟹は、はまぐりと訓しても其のかたち蛟に似て龍の類なる物なり、本草綱目に、……よく気を吐いて楼台をなす、まさに雨降らんとして見ゆ……と云へり」とある。あるいは、いわゆる「鵜蚌の争」の故事で、鵜が蚌に言ったという「今日不_レ雨、明日不_レ雨、即有_二死蚌_一」（戦国策、燕策上）という言葉に関係あるか。

◎はやくこそ 下句「馴れぬ先より変はり果てけれ」に掛かる。

◎六角町 京都、町小路の、六角小路と四条坊門小路の間の町。鎌倉中期、近江粟津供御人が進出し、南北朝以来、市中の魚類販売を独占するようになった（国史大辞典「粟津供御人」の項）。『竹馬狂吟集』に、「命に換へて魚

をこそ食へ／強盗を六角町に打ちすまし」の付合が見える。

◎なれぬさきよりかはりはてけれ 上句「……売り魚の」の続きからすれば、「熟れる」は鮓などが熟成すること、「変はり果つ」は、腐ってしまうこと。売り魚がうまく熟れない内に腐ってしまった。そのように、相手に馴れ親しむか親しまない内に、相手は心変わりしてしまった、というのである。

◎古き哥にも町をは市とこそよめれ 「……吾妹子が 止まず出で見し 軽の市に わが立ち聞けば……〈人鷹〉」(万葉集、二、挽歌)、「焼津辺にわが行きしかば駿河なる阿倍の市、道に逢ひし兎らはも〈春日蔵首老〉」(同、三、雑歌)、「無き名のみたつの市とはさわげどもいさまだ人をうるよしもなし〈人鷹〉」(拾遺集、十二、恋)、「双六の市場に立てる人妻の逢はでやみなん物にやはあらぬ〈読人不知〉」(同、十九、雑恋)、「恋をのみしかまの市に立つ民のたえぬ思ひに身をやかへてん〈俊成〉」(千載集、十四、恋)など、「市」を詠み込んだ歌は少なくないが、物を売買する場所ないし市街という意味での「町」は、伝統的な歌では詠まれない。従って「六角町」という言葉は適当でない、と言うのだが、これは難癖を付けて楽しんでいるのである。

◎六かくまちならても、魚はうりかひてん 六角町でなくても魚は売買するであろう、というのであるが、これも為にする非難である。

◎ひけのあるはいへのはちにてさつそ、ことのほかなるひけのなきかな 「ひけのあるは……」は蛤売の言葉であるが、「ことのほかなる……」は、東博本、尊経閣本では、魚売の言葉と思われる位置に書かれており、白石本、忠寄本では、はっきりと魚売の言葉と認められる。ところが、明暦板本、類従本は、「ひけのあるは……」にすぐに続けて書かれており、明らかに蛤売の言葉として扱っている。いずれを可とすべきか、未考。また「ひけ」云々が、何を話題にしているのかも、未考。『日本職人辞典』は、両者とも蛤売の言葉と見た上で、「この蛤は、食べておいしいばかりでなく、毛抜きとして使っても便利ですぞ。髭を生やしているのはみっともないです。でも、お客さん、あんたは髭がまるで無いんですねえ」と解し(「蛤売」の項)、岩崎佳枝氏は、同じく両者とも蛤売の言葉と見て、「髭のあつるようになせ、蛤(『和漢三才図会』に蛤に似た「𧄸蛤」には髭があるとす)は売らぬ」という意味だとする(『職人

歌合中世の職人群像)。なお、白石本は、「さうそ」を「さう候」とするが、誤写であろう。

◎いおり 「魚」は、中古以来、「うを」、「いを」の両語形があったが、「うを」は雅語として意識され、一般には「いを」を多く用いた。

◎いおは候……めせかし 白石本は、この言葉を落とす。

◎いおは候 「候」は「ゾウロウ」、「ゾウロ」、「ゾウ」のように濁音で読むべきであろう。「魚は（いかが）です」の意。十三番語注「あふきは候」の項参照。

【絵】

蛤壳は、烏帽子、直垂袴姿で、草鞋を履き、腰刀を差す。両端に蛤を入れた籠を括り付けた杓を前に置き、右掌に蛤を二個載せて示す。

魚壳の女は、桂巻をし、小袖の上に打掛を羽織る。右手に手鉤を持ち、左手で前に置いた魚を示す。女の左に、同種の魚二尾。魚の色は薄赤で、海水魚か。女の右に、籠に入れた小魚数尾。これは鮎か。白石本は、小袖のみで打掛は羽織らない。また、白石本、忠寄本は、女の前の魚は、箆に載せた小魚数尾。鮎か。右の籠の中は、大きな魚と海老。明曆板本は、女の左の二尾のうち一尾は黒く塗る。右の籠の中は、大きな黒く塗った魚。類従本も同様だが、魚は黒く塗らない。いずれにせよ、絵全体としては桂女の行商の姿であるが、魚の種類に疑問がある。

【参考】

○ 知らずやさても法のことはり

浮かぶとも見しはこの世ぞ鵜飼舟

〈近衛尚通〉

（新撰菟玖波集）

○ 心う舟の闇の篝火

注解『七十一番職人歌合』稿（六）

明けにけり程なき月の桂川

〈救済〉

(紫野千句、九)

○ 月には心とめぬ山陰

夜や深き登る川瀬の鵜飼船

〈宗砌〉

(初瀬千句、三)

○ 登る鵜舟の手綱苦しき

長き夜の月の闇なる霧立ちて

〈宰相〉

(同、十)

○ 霧にあかしの舟の漁火

入り方に月の桂の影冴えて

〈生阿〉

(文安月千句、五)

○ 月を含める夜半の白雲

貝拾ふ浦かけて寄る沖つ波

〈自鷲〉

(同、九)

○ 日影さす夕潮間のたえだえに

拾ふかひある漁りをぞする

〈圭承〉

(享徳千句、八)

○ 河霧に桂の里はほの見えて

鵜飼火急ぐ暮れはすさまじ

〈甚昭〉

(表佐千句、二)

○ 鵜飼火は暮れ行くままに数添ひて

はや影消ゆる初秋の月

〈清玉〉

(同、四)

○さるほどに、聳の猿源氏鰯売、都へ上りて、洛中を、伊勢の国に阿漕が浦の猿源氏が鰯買ふゑい、と言ひて商ひければ、人々これを聞きて、おもしろき鰯売哉とて、人々買い取る間、猿源氏、程なく有徳の身となりにけり。

(御伽草子、猿源氏草紙)

○これは御言葉とも覚えぬものかな。魚売の恋をしたるためしには、近江の国に堅田の浦より、鮎といふ魚を都にて売りに、ある時、内裏へ持ちて参りに、折ふし今出河の局と申す上臈を拝み奉り、肝魂も消えはて、あまり思ひやまさりに、御前の女房たちを頼み参らせて、まことに賤の身として恐れ多き申し事にて候へども、此の魚を

今出河の君さまへ奉り候ふまゝ、焼かせ給ひて参らせられ候はゞ、いかばかりかたじけなく思ひ奉らん、と申しければ、下臈の身としてやさしき心ざしかなとて、かの鮒を焼きて参らせければ、鮒の腹の中より、こまゝと書きたる文出でにける。君御覽じて、いとあはれに思召し、かたじけなくも位をすべらせ給ひ、かの魚壳に契りをこめ給ひしとなり。さればその心を、ある歌に、

いにしへはいともかしこき堅田鮒包み焼きたる中のたまづさ

とよみしも、魚故の事ならずや。

(同)

○湿る松明振り立てて、藤の衣の玉襷、鶺鴒籠を開き取り出だし、島つ巢下ろし荒鶺ども、この川波にばつと放せば、面白の有様や、底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ回はし、かづき上げすくひ上げ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報ひも後の世も、忘れ果てて面白や。漲る水の淀ならば、生簀の鯉や上らん。玉島川にあらねども、小鮎さばしるせせらぎに、かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の、燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ、鶺鴒舟の篝火消えて、闇路に帰るこの身の、名残惜しさをいかにせん、名残惜しさをいかにせん。

(謡曲、鶺鴒)

○身は蛤、ふみみるたびにぬるゝ袖かな、く

(天理本狂言、花子)

○一人出て、さかなうりと名のる。又一人出て、こめうりと名のる。道にて行き合ひて北野へ参る。さて参りて連歌する。へ散る花はさながら鯛のこけらかなへた本にこめよ梅の匂ひを

(同、連歌の十とく)

○やれ、おもしろや、えん、京には車、やれ、淀に舟、えん、桂の里の鶺鴒舟よ

(閑吟集)

○都は人目つゝましや、もしもそれかと夕まぐれ、月もろともに出でてゆく、く、雲井百敷や、大内山の山守も、かゝる憂き身はよも咎めじ、木隠れてよしなや、鳥羽の恋塚秋の山、月の桂の河瀬舟、漕ぎ行く人は誰やらん、く

(同)

○上るやら下るやら鮎が三つ連れてな、せいろう瀬にすむ淵へは入らいで、濁さじ鮎とる川の頭を、梁を打ていの鮎とる川の下にわ、鮎の白乾目許の小潮に迷ふた

(田植草紙)

○沖の浜の小浜のあの小白波やれ、さらりさつと蹴ては鞆とろいた、磯の真砂や小石と斗ばかり思ふた、高う襦取れ渚は波の高ひに、こひとわかめといそんで取るは蛤

(同)

十六番 弓作 弦売

【職人尽】

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 弓師 値打をば十三束に引きつめて弓矢八幡曲げじとぞ思ふ〔古今夷曲集〕 寄弓述懐 武官とて背中に矢壺を老いの身の腰に梓の弓を張りけり〈淡路守宗増〉 老いぬれば腰に梓の弓を張り皺のいる矢にし、ぞ失せける〈夢窓国師〉〔訓蒙図彙〕 弓人ゆみづり〔長崎一見 職人一首〕 十番左 弓打 打ち暮らし年月弓は惜しけれど又立ち帰る花の春哉 左、光陰矢のごとしといへば、月弓を惜しまれしこと尤も也。されども、花春ならはまた立ち帰れかしと言われしも又尤も也。……弓の方に心引かれ侍る。〔銀葉夷歌集〕 寄弓恋 梓弓引きてみよかし矢の竹のうきふししげく思ふ心は〈安忠〕 管を違へあはぬ人をば梓弓引くのかくのと恨みぬるかな〈行重〕〔天團〕 寄弓恋 片思ひ弓と弦ほど違ふともまたもお袖を引いて見よもの〔人倫訓蒙図彙〕 弓師 弓、我が朝にては神功后宮、異国退治の御時、八百万の御神を勧請仕り給ひて、桑の弓よもぎの矢にて敵を滅ぼし給ふと也。寺町松原より下にあり。弓懸 同所也。／ 弦 弦師をつるさしといふ。昔は洛中にて弓はやりけるゆへ、弦師弦を売るとて、弦召せと言ひけるより、弦めさつともいふ也。此の属清水坂の西に住するゆへに、坂の者ともいふ也。〔用明天王職人鑑 職人づくし〕……折さへあらば折を得て、互ひに見まく星貫、具足屋弓屋もののも、親子妹背は情知る……〔葉紅葉〕 寄弓恋 手を取りて心引き見る若衆の弓の指南をかこつけにして〈故白〕 それとなく心引き見る梓弓当たり障りを深く案じて〈同〕〔今様職人尽百人一首〕 弓師 弓を携め張る肘にして控へみん我が弓勢で的に当てつゝ、「弓山一同に振動しては」「すつきと反らぬは」「とれたけのせうがよい」「弦かけてしは、よい引き加減だ」〔職人尽発句合〕 十八番左 弓師 弓張の影つと過ぎぬ子規 右も左りも、はやき事を自負したるはことほりにこそ。かの鉦と桶との争ひはげにさすることもあるべけれど、弓矢は体用一なるからに、いづれ勝負を言ふべからず。／ 四十九番左 弦師 梓弓春の祝ひに弦を召せ梓弓春の祝ひと言ひかけし弦師が口車、抛り所あり。〔職人尽狂歌合〕 弓師・弦師 ほとゝぎす鳴きつる方は三日月の弓師もさすが反り打ちて聞く 郭公聞きて弦師も出て見ればたゞ弓張の月を残れる 左 反り打つとは背を反らすを申されしにや。さすがといふ詞ふさはしからず。右、後徳大寺殿の御歌を思ひて詠み出でられし、さら／＼と聞こえて、むつかしげなる所なし。可

為勝。／弓師 弓造る月に矢声の子規聞きはづさじとねらふ曉 ……右、弓造る月、めづらしく興あり。勝負分きがたくてぞ。〔略画職人尽〕癖直す焚き火の灰の白雪に竹を撓むる弓作かな 〔宝船桂帆柱〕 弓箭師 金儲け当たり外さぬ弓師とて矢よりのもはやき立身の的 一弓矢八幡当たりは外さぬ、何として、く〕

【本文】

十六番

ひきはへてなかき夜なからなかめはや
かけも白木のゆみはりの月

ゆふくれの山の葉みれはまつさかや
つるくところ月はいてけれ

左、本末ゆみの心ひきあひたり。右、まつ
坂やつるとはつきたれと、つるくの詞、た、
こと葉也。以左為勝。

たまつさもはねのけらるゝあらゆみの
をしかへしても人そこひしき
たのまめや人をはひとりふせつるの
きれぬちきりとおもはましかは

左、はねのけらるゝといふ、これ又たゝ詞也。
右、ふせつるのきれぬ契、よくきこゆ。可為勝。

ゆみつくり

此ゆみはつるを

注解『七十一番職人歌合』稿(一六)

ひきはへて〔類〕引はへて なかき〔類〕永き
かけ〔類〕影 ゆみはり〔類〕弓張
ゆふくれ〔類〕夕暮 山の葉〔忠〕明 山の端〔類〕山端
みれは〔尊〕見れは

ひきあひたり〔類〕ひき合たり まつ坂や〔巨〕坂や
つゝき〔巨〕つき〔類〕続き たゝこと葉〔類〕たゝ詞

たまつさ〔類〕玉札 あらゆみ〔類〕荒弓

こひしき〔類〕恋しき

ひとり〔類〕独

ちきり〔類〕契

これ又〔明〕〔類〕又 たゝ詞也〔類〕たゝことはなり

ゆみつくり〔巨〕弓作〔忠〕 十六番 弓作〔類〕弓つくり

きははんするそ。
にへおり、大事
なるへき。

つるうり

つるめし候へ。

ふせつるも候。

せきつるも候。

【語注】

◎弓作、弦売ともに、職人歌合に初出。

弓、矢、弦の製造、販売については、祇園社の犬神人が有名。「弦召さう」という売り声から、「つるめそ」とも呼ばれた。

◎ひきはへて「引き延ぶ」は、引き延ばすこと。ここでは、月の出ている時間を引き延ばすこと。同時に、枕詞的に次の「長き」に掛かる。「引く」は、弓の縁語。

◎なかかき夜なからなかめはや 秋の長い夜の間ずっと眺めていたい。実際には、月は夜半には没してしまっているのである(次項参照)。「なが」音の繰り返しの面白さを狙ったか。

◎かけも白木のゆみはりの月 「影も白」から「白木の弓」、さらに「弓張の月」と続く。「白木の弓」は、白木のままで漆を塗っていない弓。「射御拾遺抄」に、「白木、そばしらき、むらこき、これらは的弓に用ふべし」とある。

「弓張の月」は、『連珠合璧集』上に、「七日八日をば上の弓張月といふ。廿二三日をば下の弓張月と云ふ也」(「弓張月」の項)とあるごとく、上弦または下弦の月。ただし、『毛詩抄』九に、「如月恒、如日升」の句を解して、「上絃



きははんするそー〔白〕忠きはんとすると

つるうりー〔白〕弦売〔白〕弦売

せきつるー〔白〕忠せき弦

ノ月ノコトソ、下絃ノ事テハナイ、ユミハリ月ト云ハ、日々ニサカンニナテユクソ、天子ノ徳ハ月ノ日々ニマスマヤウ
ナソ」(九19才)とあり、上絃の月のみを指すという説もあつたらしい。いずれにしても、ここは、上句に「引き延
へて……眺めばや」とあるから、上絃の月と解すべきである。因みに、伝統的な歌でも、「弓」の縁語の「射る」を
掛詞に用いて、著名な「照る月を弓張としもいふことは山辺をさしていればなりけり」(大和物語、一三二段)を始
め、「弓張の山の端さしているときはあやしく物ぞかなしかりける／＼的ならで弓張ながらいる月は山の端にだにたち
とまらなん〈資子内親王〉」(円融院御集)の贈答など、山の端に入る弓張月を詠んだ歌が多い。なお、歌合に半月を
詠むのは異例だが、弓の縁でこう言つた。

◎まつさかや 「松坂」は、京都の東、粟田口から山科へ通じる日ノ岡峠の坂道。東海道の要路。謡曲「烏帽子折」
にも、「粟田口松坂や、四の宮河原逢坂の、関路の駒の後に立ちて」とある。その松坂の辺りから月が出た、とい
うのである。「まつ」に、月の出を「待つ」意を掛けるか。同時に、弓弦の一種「坂弦」を連想し、「坂やーつる」と、
枕詞的に下句に続く。坂弦は、『貞丈雑記』十に、「万礼儀之次第云、さか弦の事、さかの者のさしたる、本弰ばかり
作り納めて、いまだ末弰をばつくらずして其まゝなるを、さか弦といひ、さかのつるとも云也云々」と言う。ただ
し、これに続けて、「さかは松坂也」とし、頭書に、「坂弦は京八坂より出るを云とあれども、伊勢の松坂の説を用べ
し」とする。

◎つるく〜とこそ月はいてけれ 「つるつると」は、動きがなめらかで速やかなさま。抄物には、「是ハ去歲夏ノ時
分ナレハ、朝日カツル〜ト出テントスルソ」(四河入海、二ノ一8才)、「雲ナトモナウテ、朝日ノツル〜ト出ト
スル時ノ事ソ」(毛詩抄、七4才)などのように、日の出について言う例がまま見られるが、「此句ニ云フ新月ハ、ア
タラシク東ヨリヨイニツル〜ト出ル処ヲ云ソ」(四河入海、九ノ一36ウ)のような、月の出の例もある。ここは、
月が雲などに妨げられることなく期待どおりに出たのを賞賛する気持ち。

◎本末ゆみの心ひきあひたり 「本末」は、歌の上句と下句。弓の本末(本弰末弰)に懸けて言う。「引き合ふ」
も、弓に関連づけて言つた言葉。ここでは上下句が照応することを言うが、伝統的な判詞では、「本末あひ叶へり」

(広田社歌合、十八番判詞)、「忘れ路、と置けるより、首尾相応せるにや」(六百番歌合、恋二、三十番判詞)のように、「あひ叶ふ」、「相応す」などと言うのが普通。同様の意味で、「初五字、下にかけ合はず」(同、秋中、一番申状)のように、「かけ合ふ」という言葉も用いるので、それに似せて、「引き合ふ」と言ったか。

◎まつ坂やつるとはつききたれと 白石本は、「坂やつるとはつききたれと」とあるが、誤写であろう。

◎たゝこと葉 「ただ言葉」は、歌論用語で、歌語・雅語に対して、俗語を言う。すなわち、歌に用いるべきではないとされた言葉。「むつかし、などこそ無下にただ言葉にて、げびたるやうに思ひ給ふれども」(六条宰相家歌合、五番判詞)、「みきたまふなり、といへるや、無下にただ言葉に侍らむ」(六百番歌合、春上、一番判詞)、「花見るほどに、などいへる、無下にただ詞にやあらむ」(千五百番歌合、百八十番判詞)など、歌合の判詞にしばしば用いられる。ここでは、「つるつる」という言葉が俗語でよくない、と言う。ただし、歌の作者は、「弦」の縁であえて俗語を用いて滑稽味を出したのであり、判詞も、そのことを承知の上で、戯れているのである。弓作の恋の歌で、「撥ねのけらるる」が「ただ詞」だとされているのも同様。

◎たまつさもはねのけらるゝ 恋文を送っても突き返されることを言う。弓の縁で「撥ねのけらるる」と言った。

◎あらゆみ 「荒弓」ないし「新弓」で、「荒(新)木弓」のことであろう。「荒(新)木弓」は、『万言様之事』に、「あら木と云事、弓のむらをぬき、弦をもしかけ附巻ても一度も不射弓をあら木といふなり」(時代別国語大辞典 室町時代編「粗木・荒木」の項)とあり、作ったばかりで、まだ使い馴らしていない弓をいうらしい。「弦馴れぬあらかの弓の反高みさていたづらに引く人ぞなきへ知家」(新撰六帖、五)、「引くに帰るは荒木弓」(尤之双紙)のように、たやすく引けない弓とされている。そこで、「撥ねのけらるる—あら弓の—押し返しても」と続く。また、相手の態度が荒々しいの意の「荒」も掛けていよう。

◎をしかへしても人そこひしき 「押し返す」は、「玉章も撥ねのけらるる」からの続きでは、人の言うことを遮ったり、言い返したりすること。すなわちここでは、相手が自分の気持ちを受け入れてくれないこと。「人ぞ恋しき」への続きでは、考えなどを変えること。ここでは、つれない相手と知って、自分(作者)が思い返すこと。思い返し

てみてもやはり恋しい、というのである。また、「押し返す」には、繰り返すという意味もあるから、繰り返し思うにつけても、恋しさが拭い切れない、という気持ちも含まれていると見てよからう。

◎たのめや 「めや」は、反語的に意志を表す。あてになんかするものか。

◎人をひとりふせつるの 「人を独り臥す」は、人を独り寝させること。ここでは、つれない相手が自分（作者）を独り寝させること。「独り臥せ」から「ふせ弦の」と続く。「ふせ弦」は、弦売の言葉にもあるが、未考。『貞丈雜記』十には、「布施弦と云は、布施の海、越中国射水郡にあり。多胡ノ海とも云。此所之名産也」と言う。次の「切れぬ」を呼び出す枕詞として使われているから、丈夫な弓弦だったのであろう。

◎きれぬちきりとおもはましかは 後に、例えば「嬉しからまし」が省略された形。（そうは言うものの）切れぬ契りと思うことができたならば（どんなに嬉しいことだろう）。

◎これ又 明曆板本、類従本は、単に「又」。

◎此ゆみはつるをきはんするぞ 白石本、忠寄本は、「きはんとすると」。「きはんとする」は「きはんする」に同じだが、「と」は誤写か。「嫌ふ」は、ここでは弦によく馴染まないことを言うのであろう。

◎にへおり 「鰐膠」は、鮃（にべ）の浮袋から製する膠。弓の竹や木を合わせるのに使う。「鰐膠折り」は、『岡本記』に、「弓のにべおりといふは、いまだ弭をも切らず、撓（しな）へても見ぬ弓を、畳み又は板などに押し当てて、末弭を人に捉へさせて、さて弓を押しして見る事を、にべおりなどと常に人の申す也」とあるのによれば、製作の過程で弓の撓み具合を試みることであるが、恐らく、単に試みるのではなく、しかるべく調整することを言うのであろう。絵に描くところが、すなわちその作業であろうと思われる。

◎せきつる 未考。「関弦」とも「禦弦」とも書く。『高忠軍陣聞書』に、「式の弓の弦は巻弦なり、塗りやう、巻弦とは、常の弦の上を緒にて太刀の柄（つか）巻くごとく、違ひて巻くをせき弦といふなり、又一方へ巻くこともあり、それをも巻弦といふ也」とあり、伊勢貞丈は、「セキ弦ハ伊勢国関ト云所ニテ作シナリ」とし、また「常ノ弦ノ上ヲ糸ニテ巻テ漆ニテヌルヲ、セクト云、是モセキ弦ト云」（静嘉堂文庫蔵延享板本書入）とする。

【絵】

弓作は、烏帽子、直垂袴姿で腰刀を差し、片肌を脱いで鯨膠折りらしい作業をしている。右にいま一本の弓。左に弓に巻く籐かと思われる物の入った箱とその蓋。足下に小刀二本。うち一本は「く」の字形の物。周囲一带に、竹または木の削り滓。白石本、忠寄本は、削り滓は描かない。

弦売は、塗笠を被り覆面をし、柿色の僧衣を着る。恐らく剃髪しているのであろう。いわゆる「つるめそ」である。(似た姿は、二十一番左の草履作、右の硫黄帯売、二十四番右の煎じ物売、三十六番左のいたかにも見られる。)左手に輪にした弦を持ち、右手は弦を入れた桶の上に置く。

【参考】

○ 篋竹のなはいづれ矢をはぎが花

紅葉散る橋をも弓に作りなし

(紫野千句、七)

○ 坂の者内野の茶屋に腰かけて

神祇くわんずの弦やめされん

(犬つくば集)

○ わごりよに心つくし弓、引くにつよの心や

(閑吟集)

○ 取り入れて置かふやれ、白木の弓を、夜露の置かぬさきに、取り入れうぞなふ

(同)

○ 思ふ弓や御前引ごまへかばやはり来ひやれ、我が差いた弦ならば引かばやわり来ひやれ、殿の卷弓なんぼう強い（田植草紙）か引いてみよ、聲に参せう重籐巻の弓をば、思わゞ引かずと来ひや関弦

○ われらの弓は中くらしいの大ききで、木製である。彼らのは非常に大きく、竹製である。

(日本覚書、七)